

日本中東学会ニューズレター

JAMES
NEWSLETTER



No.168
2022/12/28

目 次

理事会報告	1
日本中東学会第 39 回年次大会の研究発表と企画セッションの募集について	2
第 28 回公開講演会報告	6
『日本中東学会 (AJAMES)』編集委員会報告	10
GEAHSS 運営会議に関する報告	10
第 20 期評議員・理事選挙実施のお知らせ	11
AJAMES バックナンバーの無償配布について	11
寄贈図書	12
会員の異動	12
連絡先をご存じないですか	12
事務局より	13

理事会報告

【2022 年度第 2 回理事会】

日時：2022 年 10 月 6 日（木）19:00～21:00

オンライン開催

出席者：保坂修司、秋葉淳、岩崎えり奈、江川ひかり、大川真由子、粕谷元、菊地達也、後藤絵美、佐藤健太郎、末近浩太、錦田愛子、森本一夫、福田義昭、堀抜功

二

欠席者：青山弘之（会長に委任）、勝沼聡（事務局長に委任）、横田貴之（会長に委任）

〔報告事項〕

1. AJAMES 第 38-1 号および第 38-2 号の編集などについて報告と説明があった。
2. 広報事業について、ウェブ管理にかかる報告があった。
3. 公開講演会について、ハイブリット形式で開催する旨報告があった。
4. 第 39 回年次大会について、筑波大学にて 2023 年 5 月 13 日・14 日に開催することが決定した旨などの報告があった。
5. 第 40 回年次大会の準備状況について報告があった。
6. AJAMES 在庫整理の進捗について報告があった。

〔審議事項〕

1. AJAMES 第 38-2 号および第 39-1 号の編集計画を承認した。
2. AJAMES 原稿執筆要領、編集委員会内規の改定を承認した。
2. 2022 年度第 20 期評議員・理事選挙の実施案を承認した。
4. 保坂会長の OIC 出張にかかる費用支出について承認した。
5. 日本学術会議シンポジウム共催および広報協力に関する要請への対応について承認した。
6. 新規入会希望を承認した。

（青山弘之 ニューズレター・書記担当理事）

【メール審議（2022 年 8 月 1 日～2022 年 12 月 20 日）】

1. 2022 年 11 月 7 日 新規入会申し込みについて
3 名から新規入会希望があり、メールでの稟議の結果、11 月 9 日にこれを承認した。
2. 2022 年 12 月 17 日 年次大会での重複報告の可否について
可否を定める規定がないため、次回年次大会で禁じることはできないが、会員の報告機会の平等性を担保したうえで、新たな規定作成に向け審議を行う旨、12 月 20 日に確認した。

（青山弘之 ニューズレター・書記担当理事）

日本中東学会第 39 回年次大会の研究発表と企画セッションの募集について

日本中東学会会員の皆様

2023年度の日本中東学会年次大会は、筑波大学が担当することになりました。例年どおり、大会一日目に公開講演会と総会を、二日目に研究発表(企画セッション含む)を行います。会場は、大会一日目はつくば国際会議場、二日目は筑波大学筑波キャンパスとなります。大会一日目はハイフレックス方式(対面・オンライン併用)、二日目は対面方式を予定しています。なお、新型コロナウイルスの感染状況により、全面的にオンラインに移行する可能性もありますので、予めご了承ください。

多くの皆様のご参加をお待ちしております。どうかご参集くださいますようお願い申し上げます。

なお、総会の開催につきましては、おっってお知らせいたします。

開催日時：2023年5月13日(土)・14日(日)

5月13日(土)：公開講演会、総会、懇親会

5月14日(日)：研究発表・企画セッション

(大会一日目の総会後に懇親会を予定していますが、新型コロナウイルスの感染状況により、中止となる可能性もありますので、予めご了承ください。)

会場(一日目)：つくば国際会議場(茨城県つくば市竹園2-20-3)

<https://www.epochal.or.jp/ja/>

会場(二日目)：筑波大学筑波キャンパス(茨城県つくば市天王台1-1-1)

<https://www.tsukuba.ac.jp/access/tsukuba-access/index.html>

【実行委員会】

委員長：柏木健一

事務局長：松原康介

委員：岩崎えり奈、上山一、近藤重人、佐藤麻理絵、塩谷哲史、松尾昌樹

*研究発表と企画セッションの応募要領は、以下のとおりです。発表をお考えの方は、どうぞ奮ってご応募願います。応募の締め切りは、2023年1月13日(金)とさせていただきますので、下記のフォームからご応募願います。採否につきましては、後日改めてご連絡いたします。

研究発表の申し込みについて

1. 研究発表

研究発表は対面で行います。発表を希望される方は、1月13日(金)までに上記の応募フォームからご応募ください。その際、以下の情報を入力してください。

※研究発表応募フォーム：<https://forms.gle/h7KYHZKVsQRdwBa9>

①連絡先メールアドレス

- ②氏名：漢字もしくはカタカナ表記
- ③氏名のローマ字表記
- ④所属：大学院生の場合はその旨を明記してください。所属がない場合は「学会員」としてください。
- ⑤発表タイトル（仮題も可）
- ⑥発表内容の概要：日本語 400 字程度／英語 200 words 程度。日本語か英語のいずれかで結構です。テーマと内容が明快にわかるように記してください。正式の「要旨」は、実行委員会での採否の決定後、改めて発表予定者に執筆をお願いすることになります。発表の言語は、原則として、日本語か英語のいずれかとします。それ以外の言語での発表をご希望の方は、実行委員会事務局までお問い合わせください。
- ⑦プロジェクター使用希望の有無：プロジェクター使用希望の有無：なお、プロジェクター以外の映像機器（OHP、現物投影機等）の使用をご希望の場合は、実行委員会事務局までその旨ご連絡ください。可能な限りご希望にそえるように致しますが、用意できない場合もありますことを予めご了解ください。また、プロジェクターに接続する PC については用意いたしますが、必要に応じて発表者各自でノートパソコンや接続用ケーブル、マックの場合は接続用アダプターをご自身でご用意下さい。
- ⑧年会費納入済の確認：発表者は日本中東学会年会費（2022 年度分）を納入済みであることが条件となっています。未納の方は応募前に納入してください。ただし、学生会員または会費特例会員として 2022 年度の年会費を免除されている方は除きます。
- ※応募された方には、年次大会実行委員会から受信確認のメールを差し上げます。受信確認メールが届かない場合は、実行委員会事務局のメールアドレス宛に必ずご一報ください。

2. 企画セッション

第 39 回年次大会では、会員による企画セッションも募集します。発表は対面で行います。特定のテーマに関する企画セッションの開催をご希望の方は、以下の要領でご応募ください。

一つの企画セッションの持ち時間は、発表・コメント・質疑応答を含め 1 時間 30 分とし、発表者は 3 名程度とします。コメンテーター（討論者）をつけるかどうかは自由ですが、必ず 1 名の司会者が必要です。企画責任者・発表者・司会者はすべて日本中東学会会員であることとします。また、企画責任者は、発表者・司会者・コメンテーターのいずれかを必ず兼ねることとします。企画責任者が、発表者と司会者、あるいは、司会者とコメンテーターの二役を兼ねることもできます。企画責任者は、1 月 13 日（金）までに以下の応募フォームからご応募ください。その際、以下の情報を入力してください。

※企画セッション応募フォーム：<https://forms.gle/LXN2ugSRcFAzSHeW6>

- ①連絡先メールアドレス
- ②企画責任者氏名：漢字もしくはカタカナ表記
- ③企画責任者氏名のローマ字表記
- ④企画責任者の所属
- ⑤使用言語：原則として、日本語か英語のいずれか。それ以外の言語をご希望の場合は、実行委員会事務局までご相談ください。
- ⑥企画セッションのタイトル（仮題も可）
- ⑦企画セッションの主旨：日本語 400 字程度／英語 200 words 程度。日本語か英語いずれかで結構です。
- ⑧参加者一覧：各参加者氏名の漢字もしくはカタカナ表記とローマ字表記の双方、所属、セッションでの役割。司会とコメンテーターは応募時点では未確定でも構いません。
- ⑨各発表者の発表要旨：⑦の企画セッションの主旨と同様の分量・要領
- ⑩プロジェクター使用希望の有無：プロジェクター以外の映像機器（OHP、現物投影機等）の使用をご希望の場合は、実行委員会事務局までその旨ご連絡ください。可能な限りご希望にそえるように致しますが、用意できない場合もありますことを予めご了解ください。また、プロジェクターに接続する PC については用意いたしますが、必要に応じて発表者各自でノートパソコン、接続用ケーブル、接続用アダプター等をご自身でご用意下さい。調整の都合上、企画内容等について、実行委員会から問い合わせやご相談をさせていただく場合があります。
- ⑪年会費納入済の確認：企画責任者は日本中東学会年会費（2022 年度分）を納入済みであることが条件となっています。未納の方は応募前に納入してください。ただし、学生会員または会費特例会員として 2022 年度の年会費を免除されている方は除きます。

※応募された方には、年次大会実行委員会から受信確認のメールを差し上げます。受信確認メールが届かない場合は、実行委員会事務局のメールアドレス宛に必ずご一報ください。

3. 託児所・託児サービス

託児所の利用をご希望の方は、実行委員会事務局までご連絡願います。また、大会期間中の託児サービスの利用に対して、費用補助を予定しています。申し込み締め切り等につきましては、おってお知らせいたします。

4. 宿泊について

以下の URL に大会会場に隣接する宿泊施設の一覧がありますので、ご参考願います。

<https://www.epochal.or.jp/ja/フロアガイド/周辺ガイド/宿泊施設/>

以上、よろしくお願い申し上げます。

連絡先

日本中東学会第 39 回年次大会実行委員会事務局

〒305-8572 茨城県つくば市天王台 1-1-1

筑波大学地中海・北アフリカ研究センター

電話：029-853-3992 ファクス：029-853-5776

E-mail：james2023tsukuba[at]gmail.com ([at]は@に読み直してください)

(第 39 回年次大会実行委員会)

第 28 回公開講演会報告

日本中東学会第 28 回公開講演会「日本と中東：歴史的・文化的関係の再発見」

日時：2022 年 11 月 26 日（土）14:00～16:50

開催形式：日本大学文理学部および Zoom ウェビナーの併用によるハイブリッド形式

登壇者：鈴木啓之（東京大学）、長谷部圭彦（東京大学）、神田惟（東京外国語大学）、
ハガグ・ラナ（一橋大学）

司会：後藤絵美（企画担当理事）、開会の言葉：粕谷元（企画担当理事）、閉会の言葉：
保坂修司（会長）

【開催報告 1】

2022 年 11 月 26 日（土）に日本中東学会第 28 回公開講演会「日本と中東：歴史的・文化的関係の再発見」が、会場（日本大学文理学部）及び Zoom ウェビナーの併用によるハイブリッド形式で開催された。明治時代以降、日本と中東は、直接的な関係を築き上げ始め、戦前・戦中には、日本が回教政策を通じて中東と良くも悪くも主体的に関わってきた。本講演会では、回教政策の破綻後に失われていったと言われがちな日本と中東との主体的な関係や問題点もはらむ文化的関係の知られざる側面を、4 人の講演者が各自専門とする地域や分野の歴史・文化から「再発見」することが企図された。以下、当日行われた講演の内容について簡単に振り返る。

鈴木啓之氏の「1970 年代における連帯運動と訪日パレスチナ人：現代史におけるパレスチナ問題の射程」では、パレスチナと日本との関係について、転換点とされる 1970 年代におけるパレスチナ人のパレスチナ問題の発信活動、日本社会の関わりや認識のありようを軸に解説された。パレスチナ人の武装闘争に対する日本の関わりとして、革命の連帯と銘打った日本赤軍による参加が挙げられた。このような出来事は日本とパレスチナとの関係に強い印象を与えたが、その後の動きを決定づけるものとはならなかったことが指摘された。一方、アジア卓球大会へのパレスチナ選手団の参加が

PLO 東京事務所開設の前段階にあったこと、当時 PLO 在レバノン事務所長のアル＝フートや PLO 政治局長のカッドゥーミの来日といった、パレスチナと日本との武装闘争以外の関わりが紹介された。さらに、カタール政府高官として来日したサイド・ミスハールが、神戸製鋼のカタールでの事業に関与していたことは、パレスチナ問題の中東全域における広がりを考える上でも非常に示唆的であると論じられた。日本のメディア記事や研究者の見解などを踏まえ、当時のパレスチナ人の活動実態とそれへの日本の関わりを包括的に取り上げた本報告は、日本と中東との関係を捉えるにあたり重要な視座となる内容であった。

長谷部圭彦氏の「大統領の畑を耕し、トルコ人と絹を織る：大谷光瑞によるトルコ初の日本資本」では、建国直後のトルコ共和国と日本の関わりについて、大谷光瑞によるトルコへの投資と、現地の著名人との共同経営から解説された。ブルサにおける農場計画は実現されなかったものの、光瑞が投資先としてのトルコに言及していたのは、トルコ共和国の成立からわずか3ヶ月後であったこと、光瑞の事業は、大阪商業会議所および外務省との協力の中で取り組まれたことが、特徴として挙げられた。ブルサ農場計画が流れた後に実現されたアンカラの農場経営では、当時大統領であったアタテュルク自身が経営する農場の一部が提供され、またトルコ勸業銀行から出資を受けていた。当時のトルコ勸業銀行の頭取は、後の第3代大統領ジェラル・バヤルであったことから、結果として光瑞は、二人の大統領と農場経営を行っていたことになる。しかし、日本の回教政策への危機感などにより、アンカラでの農場経営は終わりを迎えた。その後、光瑞は、現地の工業奨励法に基づく免税許可を得て、ブルサで絹布工場を経営するも、同工場の操業は、紆余曲折を経て1932年に停止された。これらの事業は、当時の日本が主体的に中東と関わりを持つに至る先駆けとして、日本と中東の歴史的関係に対する聴講者の興味・関心を喚起した。

休憩をはさんで行われた後半の講演は、日本におけるペルシャ陶器への関心の高まりとクルアーン翻訳における問題から、中東との関係を「再発見」するものであった。

神田惟氏の「1950年代～80年代の日本における『ペルシャ』陶器の収集・展示・出版」では、なぜ当時日本で「ペルシャ」陶器に対する関心が高まったのか、その文化的・社会的な背景を明らかにすることが目的とされた。はじめに、「ペルシャ」古美術品に対する大衆の関心の高まりの契機として、東大イラン・イラク遺跡調査団による調査に加え、イランと日本との間で文化協定と経済技術協力協定が結ばれた1958年以降、正倉院御物の一部がイラン（ペルシャ）製であることが殊更強調される傾向にあったこと等が挙げられた。次に、「ペルシャ」陶器のコレクター層や入手経路について、戦前（1920～30年代）と戦後（1950～80年代）の比較が提示された。戦前と比べて、戦後ではコレクター層の裾野が拡大したこと、また日本人の好みのフィルターを通じて現地での収集が可能となったことが指摘された。神田氏がとくに注目したのは、古美術商が現地で購入し、学者が産地・年代同定を行い、画家が古美術商から買うという三者関係である。この関係性は「ペルシャ」陶器そのものや、それを描いた静物画が人々の目に触れるに至った経緯にも関わるものであった。また、ニーシャープールから得られたとされる陶器が「民芸風」タイプであり、日本人の好みに合致していた

こと、さらに、いわゆる「ペルシャ三彩」のデザインが唐三彩とどこか繋がっていることを想起させるものであったことから、日本における「ペルシャ陶器」への関心の背景を読み取ることができると氏は指摘した。こうした日本と中東との主体的な文化的関係の「再発見」は、どこか地理的には遠い中東の文化に対する親しみを抱かせるものであった。

ハガグ・ラナ氏の「クルアーンはなぜ翻訳できないか：クルアーンの日本語訳を例にして」では、日本で初めて口語訳された井筒俊彦訳と日本語を理解するムスリムに向けられた三田了一訳とを比較し、それぞれが異なる読者を想定していることをふまえて、クルアーンが日本語に翻訳される際の問題点が解説された。「どっかと腰をおろし」「われこそはアッラーであるぞよ」といった井筒訳に見られるように、口語的な翻訳にはアッラーに人間的な要素を帯びさせてしまう問題があると指摘された。また、井筒訳に頻繁に見られる「ぞ」「じゃ」「よ」などの終助詞には、聞き手に対する注意喚起の役割があると解説された。このことから、クルアーンが創造主アッラーからの語り掛けを表す言葉から成ることを踏まえ、井筒訳ではアッラーとムハンマド／ムスリムが発話場面を共有していることを表そうとしたと説明された。しかし、こうした終助詞の使用は、アッラーを「年配の男性」として表象させる危険性があり、また卑俗で日常的な表現になってしまうことが指摘された。一方で、「玉座に鎮座なされる」「本当にわれはアッラーである」といった終助詞のない三田訳では、荘重さにまさる書き言葉の選択があったと解説された。最後に、以上に見てきた二つの翻訳の違いとして、日本語とは異なり、荘重でありつつ感情表出型の文体がよく見られるアラビア語の二重の性質、両者のイスラーム理解と翻訳ストラテジーの違いが挙げられた。本報告によって、翻訳の奥深さ、広くは言語学の世界に心惹かれるものを感じられ、またアラビア語に対する興味・関心が大いに高まった。

保坂修司氏による閉会の言葉を借りれば、これらの報告は、「中東への関心の低下」と「ロシア・ウクライナ戦争によるエネルギー危機」に直面している現在の状況において、「中東への関心を持ち続ける」一つのきっかけとなった。また各自の専門から、本講演会の主旨である「日本と中東の歴史的・文化的関係の『再発見』」がなされ、報告者にとって、中東に対する親近感が抱かせられる良い機会であった。

最後に、このような貴重な会を、円滑に運営して下さった皆様に、この場を借りて心より感謝申し上げます。

(東京外国語大学大学院博士前期課程・浪内紫雲)

【開催報告 2】

「日本と中東：歴史的・文化的関係の再発見」と題する日本中東学会第 28 回公開講演会が、2022 年 11 月 26 日（土）、日本大会会場とオンラインのハイブリッド方式にて開催された。後藤絵美氏（東京外国語大学）の司会のもと、まず開会の言葉にて粕谷元氏（日本大学）が、日本と中東との間の歴史的関わりについて説明を行った。

鈴木啓之氏（東京大学）の「1970 年代における連帯運動と訪日パレスチナ人：現代

史におけるパレスチナ問題の射程」では、日本とパレスチナとの関係性を捉える上で重要な時期である 70 年代に着目し、「連帯」をキーワードに活動が展開してきたことが指摘された。特に文化活動に注目した際には、武装闘争に依るのではなく広報活動を通じた外交的・人的働きかけがあったこと、それが PLO 東京事務所開設 (1977) につながり、80 年代以降の日本におけるパレスチナに関する活発な議論・活動にも結びついたことが指摘された。さらに、1970 年代は研究の転換点としても捉えることができるとして、パレスチナ問題を捉える射程の広がり示唆された。

長谷部圭彦氏 (東京大学) の「大統領の畑を耕し、トルコ人と絹を織る—大谷光瑞によるトルコ初の日本資本」では、日本・中東関係史のうち、あまり知られていないと思われる事例として、大谷光瑞によってなされたトルコ共和国への投資に注目し、アンカラとブルサでの二事業の展開をたどった。大谷がアタテュルク大統領とアンカラで農場の共同経営を行っていたこと、さらにブルサでの絹布工場事業の展開に触れつつ、双方とも当時制定・施行されたばかりの商法が適用されていたことから、二事業がトルコ共和国初期の産業振興の潮流の中に存在していたことを指摘し、大谷の活動をトルコ史の文脈に位置付けた。

神田惟氏 (東京外国語大学) の「高度経済成長期の日本における「ペルシャ」陶器の収集・展示・出版」では、伊東深水ら「ペルシャ」陶器を描いた昭和期を代表する画家たちに触れつつ、日本国内における「ペルシャ」古美術品に対する関心の高まりの契機、1950 年代から 80 年代の日本におけるコレクター層、1950 年代から 80 年代の日本における「ペルシャ」陶器および「ペルシャ」陶器画の展示・出版、国内所蔵の「ペルシャ」陶器コレクションの活用可能性について述べられた。特に 1958 年以降、イランとの交流活発化とともにコレクター層が拡大する中、古美術商、学者、画家との間で密接なつながりが見出され、学者の言とともに「ペルシャ」陶器のラベリングがなされていったことが指摘された。

ハガグ・ラナ氏 (一橋大学) の「クラーンとはなぜ翻訳できないか: 「声の文化」に生きるイスラーム」では、まず翻訳ストラテジーの存在を指摘した上で、クラーンの日本語訳についての詳細な考察が行われた。特に口語体と文語体の対比という視点から、三田訳と井筒訳それぞれの翻訳文が言語学的観点から検討された。ハガグ氏は、井筒訳においては終助詞が多用されていることを指摘し、同時に、三田訳が起点言語志向であり、井筒訳が目標言語志向であると述べた上で、文体の選択は思想の選択を反映したものであり、それは翻訳者のイスラーム理解の違いに基づくものであると指摘した。こうした翻訳ストラテジーに基づく文体の違いは、「正しい翻訳」とはなにかという問いを生じさせるものであり、それはあらゆる読者に課せられた課題であると指摘した。

続いて行われた質疑応答では、4 名の登壇者それぞれに対して複数の質問が投げかけられ、会場とオンラインの双方において、活発な議論が展開された。

そして最後に、閉会の言葉にて保坂修司氏 (日本エネルギー経済研究所、日本中東学会会長) がそれまでの議論を総括し、さらなる研究の展望について言及した上で、ウクライナ戦争下、エネルギー危機に見舞われた昨今だからこそ、エネルギーの観点

から深いつながりを有してきた日本と中東の関係性を再考する必要があると述べ、会を締めくくった。

政治・外交・経済・文化・芸術と多岐にわたる分野から、それぞれ異なる視点で日本と中東の関係を分析・考察した今回の講演会は、これまで顧みられる機会が多くなかった、日本と中東との関係性を見直し、考えるひとつの機会となった。

最後に、ハイブリッド方式の公開講演会を滞りなく運営されたみなさまのご尽力に深い感謝の念をお伝えしたい。

(東京大学大学院総合文化研究科修士課程・濱中麻梨菜)

『日本中東学会 (AJAMES)』編集委員会報告

- 38-2号は、2月中の刊行を目指して編集作業を鋭意進めております。
- 39-1号投稿論文の審査を行っております。投稿いただいた方には2月初め頃までに審査結果をお知らせいたします。
- 39-2号の投稿締め切りは6月1日です。皆様の御投稿をお待ち申し上げております。
- AJAMESではご投稿の確認メールは数日以内に返信させて頂いております。万が一、届いていない場合は、至急、編集長の大学メールアドレス (aikon0213@keio.jp)宛にご連絡頂ければさいわいです。
- AJAMESでは、会員による中東関連の博士論文要旨(英文)を掲載しています。最近博士論文を提出された会員の方は、ぜひご投稿ください。
- AJAMESでは現在、欧文(英語・フランス語等、日本語以外での原稿)での特集の企画を募集しております。企画をお持ちの方は、直接ご投稿いただくか、編集長までご相談ください。どうぞよろしくお願ひ致します。

本誌に関するお問い合わせ先、原稿投稿先は以下のとおりです。

〒108-8345 東京都港区三田2丁目15番45号

慶應義塾大学 研究室棟604B 錦田愛子研究室気付

『日本中東学会年報』編集委員会

E-mail: ajames-editor@james1985.org

(錦田愛子 AJAMES 編集委員長)

GEAHSS 運営会議に関する報告

2022年9月25日(土)、人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会(GEAHSS)の第5期第2回運営会議がオンラインにて開催された。現在72学協会が加盟していることが報告され、決算報告、活動報告があった後、第5期会計幹事の変更について

審議がおこなわれ、第5期会計幹事が大島郁葉氏（日本認知・行動療法学会）から松永美希氏（日本認知・行動療法学会）に交代することが審議の結果承認された。HP改修に際しユニバーサル・デザインに変更すること、これまで個人がボランティアとして担ってきた事務局長職について事務局長が常勤の職を有していない場合には月1万円の謝金を支払うことも審議の結果承認された。続いてGEAHSS第6期（2022年10月1日～2023年9月30日）の予算と活動計画について審議がおこなわれ、第6期のシンポジウムにおいてはZoomの契約費は幹事学協会ではなくGEAHSSが負担すること、オンライン・シンポジウムであるため謝金、交通費、印刷費を計上しないことが審議の結果承認された。第6期の委員長を藤井和佐氏（日本社会学会）、副委員長を椎野若菜氏（日本文化人類学会）とする役員会からの提案に対して投票がなされ、過半数の賛成により承認された。委員長・副委員長の交代に伴い、委員長が所属する日本社会学会が第6期幹事学協会、副委員長が所属する日本文化人類学会が第6期副幹事学協会となることが報告された。第6期会計幹事を松永美希氏（日本認知・行動療法学会）、吉原雅子氏（日本哲学会）の2名とする役員会からの提案に対しては、投票の結果賛成多数により承認された。

（菊地達也 渉外担当理事）

第20期評議員・理事選挙実施のお知らせ

すでにメーリングリストにてお知らせしたように、今期（第19期）の評議員・理事の任期が今年度末に終了するのに伴い、次期（第20期）評議員・理事選挙を実施中です。評議員選挙は2022年12月22日に、選挙管理委員会のオンライン立ち合いの下に開票作業が行われて、60名の評議員が選出されました。その後、新たに選出された評議員の中から理事会選挙の投票が行われており、2023年1月11日に開票作業を予定しております。

（堀抜功二 事務局長）

AJAMES バックナンバーの無償配布について

日本中東学会では、2022年8月から11月にかけて『日本中東学会年報 (AJAMES)』のバックナンバー在庫の整理と希望する学会員への無償配布を実施いたしました。7会員から合計117冊の引き取り希望があり、一部の在庫切れのものを除き、配布を完了しております。また残りのバックナンバーについては、学会保管分を除き予定通り廃棄処分いたしました。

なお過去のAJAMES掲載論文についてはJ-stage (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/ajames-char/ja>) でご確認いただくか、お近くの図書館等でご確認ください。

(堀抜功二 事務局長)

寄贈図書

【逐次刊行物・ジャーナル・その他】

『季刊アラブ』 No.180、日本アラブ協会、2022年7月
『季刊アラブ』 No.181、日本アラブ協会、2022年10月
『sadāqah』 No.243、日本サウディアラビア協会、2022年9月
『アラブ・イスラム研究』第20号、関西アラブ研究会、2022年8月

(堀抜功二 事務局長)

会員の異動

【新規会員】

木下 博子
Reza Asadian 慶應大学大学院
磯部 香里 University of Exeter
萩原 優太 東京外国語大学 国際社会部国際社会学科
小保内 漣 桐朋高等学校

【所属先変更】

大石 賀美 プログレ法律特許事務所
竹田 敏之 立命館大学 立命館アジア・日本研究機構
桑原 尚子 岩手県立大学 総合政策学部
神田 惟 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所
大庭 竜太 信州大学 学術研究・産学官連携推進機構

(堀抜功二 事務局長)

連絡先をご存じないですか

下記の会員の方々は、連絡先が不明なため、学会からのお知らせなどをお届けすることができないでおります。連絡先をご存じの方は、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご面倒でもご本人にお伝えいただければ幸いです。

苗村 卓哉	モハメド オマル アブディン	横田 吉昭	西舘 康平
後藤 信介	ファトヒー モハンマド	矢倉 美砂子	西川 優花
林田 花枝	Mohamad Haidar Reda	早矢仕 悠太	住吉 大樹

ターリク フセイン ハカミー Abhu-Hajjar Iyas Salim
Abuhajir Rehab A

(堀抜功二 事務局長)

事務局より

第19期の事務局では、歴代の事務局資料やAJAMESのバックナンバーの整理作業を行っています。大量の紙と埃に悪戦苦闘しながらも、37年間にわたる日本中東学会の歴史の重さを感じました。

(堀抜功二 事務局長)

日本中東学会ニューズレター 第168号

発行日 2022年12月28日

発行所 日本中東学会事務局

日本中東学会事務局

〒104-0054

東京都中央区勝どき1-13-1 イヌイビル・カ
チドキ10階

(一財)日本エネルギー経済研究所 中東研
究センター内

E-mail: james@james1985.org

<http://www.james1985.org/>

郵便振替口座：00140-0-161096(日本中東学会)

ゆうちょ銀行口座：〇一九店(当)0161096

(ニホンチュウトウガクカイ)